

## 盲詩人唐汝詢の受容と評価：『編蓬集』諸序を中心に

陳, 禕璇  
九州大学中国文学講座：専門研究員

<https://doi.org/10.15017/7405117>

---

出版情報：中国文学論集. 54, pp.31-48, 2025-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



# 盲詩人唐汝詢の受容と評価

——『編蓬集』諸序を中心に——

陳 禕 璇

## 一 『編蓬集』とその諸序文

唐汝詢（一五六五～一六五九）は、字は仲言、松江府華亭（上海市松江區）に生まれ、五歳で失明して以降、生涯を盲目の詩人・学者として歩んだ人物である。自ら「雲間廢人」と称しながらも、志を曲げることなく詩文の研究を続け、その成果は数種の著作に結実した。代表作に唐詩選集の『唐詩解』があるほか、自作の詩文集も同時代の文壇で注目された。『海上』『姑蔑』は現存せず書名のみ伝わり、今日に伝わるのは『酉陽山人編蓬集』（以下『編蓬集』と略称）と『酉陽山人編蓬後集』（以下『編蓬後集』と略称）である。

時系列に見ると、まず万曆三十六年（一六〇八）の序をもって『編蓬集』が刊行され、その十年後の万曆四十六年（一六一八）に続編『編蓬後集』が上梓された。なお、この間、万曆四十三年（一六一五）には代表作『唐詩解』も世に出ており、唐汝詢の学問的営為と詩の実践は、明末の文学史において相互に照応しつつ展開している。『編蓬集』と『編蓬後集』には、自作の序や賦、古体詩、近体詩などが収められ、口誦を諳んじる記憶力を基盤として築き上げられた豊饒な詩境が示されている。

『編蓬集』十巻は、詩歌八百三十六首を収める。続編の『編蓬後集』十五巻は、詩歌八百七十一首に加え各種文章五十五篇を収める。これらの詩文集には、唱和詩や贈答詩が数多く収録されており、当時の名流士族との交遊を知る手がかりともなっている。陳繼儒・鍾惺・張所敬といった人物との往来は、その代表的な例である。

しかし、唐汝詢が同時代にいかなる評価を受け、いかに文人社会に受容されたのかについては、作品そのものだけでは十分に明らかにしえない。その一端を示すのが、『編蓬集』『編蓬後集』に付された身辺の人物による序文七篇である。これらの序文は長篇で内容も多岐にわたり、そこから彼の文学的地位や人間的評価を窺うことができる。本稿では論文末尾の資料篇に全文と要約を付すこととし、はじめに、序文七篇の基本情報を整理して示せば以下のとおりである。

〔編蓬集叙〕

作成時間

本文に明記なし

作者

李維楨<sup>③</sup>

唐汝詢との関係

友人

〔編蓬集序〕

作成時間

万曆戊戌孟秋日<sup>④</sup> 一五九八年の秋

作者

唐之屏<sup>④</sup>

謄抄者

陸齊賢<sup>⑤</sup>

唐汝詢との関係

唐之屏は自ら「兄唐之屏」と記すが、実際は従兄である。陸齊賢は友人。

〔報唐仲言書〕

作成時間

万曆乙巳九月晦日<sup>⑥</sup> 一六〇五年九月三十日

作者

許維新<sup>⑥</sup>

唐汝詢との関係

文友。(唐仲言から書簡と詩を受け取り、それに返信したもの。)

〔仲言弟編蓬集後序〕

作成時間

万曆戊申二月中澣<sup>⑦</sup> 一六〇八年二月中旬

作者

唐汝諤<sup>⑦</sup>

善抄者

唐道孚<sup>⑧</sup>

唐汝詢との関係

唐汝諤は、唐汝詢の実兄、唐道孚は友人。

〔編蓬後集小引〕

作成時間

本文に明記なし

作者

李維楨

唐汝詢との関係

友人

〔編蓬後集序〕

作成時間

万曆戊午臘月既望 一六一八年十二月十六日

作者

劉錫玄<sup>⑨</sup>

唐汝詢との関係

友人

〔贈唐仲言序〕

作成時間

万曆丁巳嘉平月 一六一七年十二月

作者

鍾惺<sup>⑩</sup>

唐汝詢との関係

友人

## 二 友人・兄弟の間における唐汝詢像

各序文では『編蓬集』という名称の由来や作者が盲目であることについて、多面的に論じられている。李維楨「編蓬後集小引」や唐汝諤「唐汝詢弟編蓬集後序」では、いづれも卜子夏の故事に由来すると明言している。卜子夏は子を喪い嘆き、哭して失明し、壞室に住んで蓬を編み戸とし、琴を弾いて古の詩を伝えたとされる。卜子夏は詩学に深い造詣を持つ人物であった。この典故を踏まえ、幼少で盲目となった唐汝詢の境遇を子夏になぞらえて『編蓬集』と命名したのである。唐之屏の序においても「編蓬命篇、義取卜商之語（編蓬篇を命ずるは、義は卜商の語を

取りたり」と明記され、同じく子夏に由来することが確認できる。李維楨・唐汝諤・唐之屏の各序は卜子夏の典故により、盲目が詩才を磨く契機となったことを強調している。

また、ほかの盲目者に関する典故について、さらに劉錫玄「編蓬後集序」では、左丘明が書を読み字を識った後に天刑を受け失明したことを述べ、これを唐汝詢と比較して特異性を示す。また、同序文では唐代の羅暎和尚（靈知禪師）を引き、聴力のみで仏典に通じた僧侶の例を挙げることで、唐汝詢の才能を仏教的な「六根互用」の境地に位置づけている。

これらの序文のうち、唐汝詢の実の兄弟や、実際に親しく交わった友人による文章は、最も切実で具体的な唐汝詢像を伝えている。とりわけ、兄唐汝諤と唐之屏、さらに親友であった許維新・劉錫玄・鍾惺の記述は、唐汝詢の詩才を単なる文人としての評価にとどめず、個人的な感情や理解を交えて語っている点で注目される。

唐汝諤は、弟の生涯を身近で見守った者として、盲目という不幸を「幸而以盲故、得工於詩（幸ひに盲なるが故に、詩に工を得たり）」と逆説的に捉えている。幼少期に治療の機会があれば視力を保てたはずだという悔恨を述べつつ、結果として盲目が詩才を極める契機となったと語るのである。彼は父が杜甫の詩を口伝えにした情景を仔細に描き出し、唐汝詢が次第に陶淵明や李白・杜甫へと至った過程を「久之即寢食都忘、覺魂交夢想之中（久しくして、即ち寢食すら都て忘れ、覺魂の夢想の中に交はるを覺ゆ）」と形容した。兄ならではの眼差しは、深い同情と誇りが交錯するものであろう。

これに対し、従兄の唐之屏も従弟を惜しむ点は変わらないが、より哲学的な修辭を多用して語る。「幸毀其目、不毀天竅（幸ひに其の目を毀つも、天竅を毀たず）」と述べ、視力を失ったとしても天から授けられた根本の才覚は損なわれなかったと断じるのである。彼はまた「不予之予」「無用之用」といった表現を駆使し、従弟の不遇を解釈した。

兄や従兄が身内ゆえの切実さをもって唐汝詢を描いたのに対し、友人たちは、親族外からの敬意と交友体験に基づくものであった。許維新は、唐汝詢を「洞裡真人」と称し、世俗を超越した精神性を備える存在として描き出した。彼は唐汝詢の詩篇を「諸篇皆雅什（諸篇は皆、雅什なり）」と高く評価しつつも、注釈や校勘の点で「須求細心

者校讐為快（須らく細心なる者を求めて、校讐を快と為すべし）」と率直に助言している。この姿勢には、単なる贊美に留まらぬ友人らしい誠実な批評精神が表れている。

一方、劉錫玄は唐汝詢の創作過程に注目し、目ではなく「双耳所入」から「寸竅所出」へと至る独自の仕組みを強調した。彼はこれを「六根互用」と表現し、仏教的な語彙を用いて唐汝詢の才能を神異的な現象とみなしている。劉錫玄自身は視覚を持ちながら凡俗にとどまることを恥じ、唐汝詢の「無眼而有眼」の境地に自らを照らして省察する。その筆致には、敬意と共に自己反省を誘う親友としての真情が滲んでいる。

さらに鍾惺は、自身の体験を通じて唐汝詢の特質を描いた。彼は自作の詩を唐汝詢に正確に誦んじられたことを回想し、「予凄然」と深い感動を表現している。唐汝詢が他人の朗誦に依存せざるを得ない状況を「終其身寄於所不可必者也（其の身を終ふるに、必ずしもすること能はざる所に寄せたり）」と指摘しながらも、それを数十年にわたって持続させ得たのは唐汝詢の「誠」によるものだと断じるのである。彼にとって唐汝詢は、不安定な条件を誠実さによって超えた存在であり、そこにこそ真の価値を見出した。

このように、兄弟と親友の記述を並べてみると、それぞれの視線は異なりつつも、共通して「盲目」という制約を単なる不幸として語らず、それを詩才の鍛錬の契機として捉え直そうとする点に収斂していることがわかる。兄弟は切実さをもって、友人は敬意と体験をもって、唐汝詢の詩才を支え、評価した。

### 三 唐汝詢の創作について

唐汝詢が盲目の詩人として知られるのは、七篇の序文に繰り返し語られる事実である。彼は五歳で視力を失ったにもかかわらず豊かな詩文の世界を切り開いた。注目すべきは、彼が単なる障害者として語られるのではなく、むしろ盲目であるがゆえに特異な詩的資質を備えた人物として描かれている点である。その創作方法について、諸序文の記述を読み解くと、いくつかの特徴が浮かび上がる。

まず李維楨は、唐汝詢は「以耳為目、声入心通、矢口而成章（耳を以て目と為し、声入りて心に通じ、口を矢の

ごとくして章を成す」と記される。通常、人は目から知識を得るが、唐汝詢は耳を通じて詩文を吸収し、そこから自然に文章を生み出したとされる。この方法は単なる代替ではなく、聴覚を基盤とする学習の積み重ねが彼の創作を支えたことを示すものである。さらに彼の詩作は「擬古百体」に及び、多様な形式を自在に操る水準に達していたことが強調される。

唐汝誥も弟の創作過程を描いている。兄によれば、唐汝詢は幼少期に失明し「幾於生不識天日（生まれて天日を識らざるに幾し）」であったが、杜甫の詩を父から教えられるとすぐに自作の詩を示した。以後、陶淵明や謝靈運、大曆諸家に至るまで幅広く学び、「恍若棲神千古而自忘其盲（恍かに神を千古に棲むるが若くして、自ら其の盲を忘る）」と表現されるほど詩の世界に没入した。ここでは、詩作が日常生活を超える精神的営みとして位置づけられている。

唐之屏も唐汝詢の姿を具体的に記している。「五齡而言、独好古詞賦、不輟于口（五齡にして盲となるも、独り古の詞賦を好み、口に輟まらず）」と述べ、視力を失っても詩を口ずさむことを止めなかつた点を強調する。そこには、学問への執念や継続的努力が他者と異なる形で現れており、「六籍百家、無不扶其窻窻（六籍・百家、其の窻窻を扶らざるは無し）」と、耳から得た知識を整理して自家の成果に転化したことが評価されている。

さらに鍾惺は、唐汝詢の創作活動が「数十年中、以其心聽命於其耳、以其耳聽命於人之口（数十年の中、其の心を以て其の耳に命を聴き、其の耳を以て人の口に命を聴く）」と、他人の朗読に依存していたことが述べられる。通常ならば持続困難な方法であるにもかかわらず、誠実さをもってこれを数十年続け、多くの詩文を生み出した。その成果は知識の広さだけでなく、真摯な態度と継続力に根差していることが示されている。

このように七篇の序文を整理すると、唐汝詢は耳から得た知識を基盤に、強靱な記憶力と不断的努力によって詩作を行ったことが明らかとなる。盲目であることは制約であると同時に、学習と創作における独自の方法を促す契機でもあった。彼の作品は、その特異な方法を通じて形成されたものであり、だからこそ後世に強い印象を残したのである。

#### 四 「障害」から「神異」への転換

『編蓬集』および『編蓬後集』に寄せられた七篇の序文を読むとき、彼が単に「視力を失った文人」として記録されたのではなく、盲目であること自体が天授の才能を象徴するものとして語られている傾向が窺える。そこには宗教的・哲学的な語彙を駆使し、目の不自由を神異へと昇華する一種の修辭的戰略が見られるのである。

まず最も明瞭に宗教的語彙を用いるのは李維楨である。彼は唐汝詢の学びを「君子之学」とし、荀子の言葉を用いてその特質を説明し、通常の人間が持つ視覚的学習を超えて、聴覚と心の直結による神秘的な学びを示している。さらに「国家積徳二百年而大楽未能復古(国家、徳を積むこと二百年にして、大楽いまだ古に復する能はず)」と述べ、唐汝詢がもし周代の宮廷にいたならば、大楽を正す存在になり得たとまで讃える。これは単なる個人評価にとどまらず、歴史的・宗教的秩序の継承者として位置づけるものである。さらに、上述の子夏が失明した故事を引く。唐汝詢の盲目を儒家聖門の伝統と結びつけることにより、個人的不幸が普遍的意味を帯びるのである。

次に唐汝謬もまた、哲学的解釈を与えている。兄は弟の失明を単なる悲運として描かず、「天之奪其明於此者、未必不張其目於彼(天の其の明を此に奪ふ者は、未だ必ずしも其の目を彼に張らざるに非ず)」と述べ、視覚を奪った天が別の形で心眼を開いたと説く。この逆説的構図は、障害を超越的恩寵へと転換する典型である。さらに卜子夏が老いて盲となり琴を弾いた故事を重ね合わせ、唐汝詢の境遇を古代聖賢の系譜に連ねる。ここでも儒家的典拠を用い、盲目を徳と才の表れとして再解釈する姿勢が見られる。

唐之屏も宗教的語彙を含む。先述の「不予之予、亡用之用」という老莊的觀念を引き、無用に見えるものこそが真に尊いと説く。唐汝詢の盲目も「無用の用」として理解され、むしろ世俗の目には映らない深い知性を形作るものとされた。「信乎、不予之予滋大、無用之用弥尊(信にかな、予へざるの予、大いに滋し、無用の用、弥々尊し)」との結語は、その思想的背景を端的に表している。唐之屏は弟を庇護する兄弟の立場から書いているが、同時に道家哲学をもって従弟の不遇を再解釈し、そこに普遍的意義を与えようとしたのである。

劉錫玄は仏教的語彙を駆使する。先掲の「六根互用」によって、唐汝詢が視覚を失ったことにより耳が目の役割

を果たし、感覺器官が相互補完的に働く境地に達したと論じる。また『首楞嚴經』の「耳具千二百功德、眼止八百功德（耳は千二百の功德を具へ、眼は止だ八百の功德のみ）」を引用し、學問において耳の優位を仏典の權威によって正当化する。これは明確に宗教的言説によって盲目を肯定的に意味づける試みである。さらに彼は「六根互用の奇」と評し、唐汝詢の存在を人間的限界を超えた神異として描き出した。

鍾惺はやや異なる角度から描く。彼は唐汝詢が他人の朗誦に依存して詩を作り続けた事実を指摘する。通常であれば持続不可能な方法であるが、唐汝詢は誠実さをもってこれを続けた。鍾惺はその根底にあるものを「誠」と呼び、宗教的な徳目に近い価値として強調する。ここでも盲目という制約は、誠実さという道德的・哲学的価値に昇華されている。

許維新の場合は直接的な宗教語彙は少ないものの、唐汝詢を「洞裡真人」と呼ぶ点が注目される。「真人」とは道家思想における理想的存在であり、世俗の浮薄を見ないことで精神的純粹性を保持する人物を指す。ここでも盲目は、世の雑事を避け精神の清明さを得る契機として解釈される。具体的な創作方法には触れられておらず、未詳であるが、その評価は宗教的枠組みの中でなされている。

以上、序文七篇を総合すると、唐汝詢の才能はしばしば宗教的・哲学的言説によって頌揚されたことが明らかである。儒家的典拠（子夏・荀子）、道家的觀念（無用の用・真人）、仏教的經典（首楞嚴經）、さらには徳や誠といった倫理的価値が援用され、彼の盲目は単なる身体的欠損ではなく、神領天授の資質として再評価された。こうして障害はむしろ才能を証明する要素として位置づけられ、唐汝詢は「仙聖之種」「洞裡真人」「六根互用の奇」といった称号をもって語られることになったのである。

七篇の序文は共通して、唐汝詢の盲目を否定的に描くのではなく、宗教的・哲学的言葉をもってその存在を神異的詩人へと昇華している。障害を悲劇としてではなく、むしろ天から与えられた特別な使命の証と捉える視線こそが、これら序文の最大の特徴であると言えるであろう。

【資料編】『編蓬集』諸序（原文および現代語訳）

〔原文〕

編蓬集叙

古人之樂、皆古人之詩也、而其事恒隸之聲。太師教瞽矇六詩、曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌。以六德爲之本、以六律爲之音。樂成則告備、詔來瞽曰、勅爾瞽、率爾衆工、奏爾悲誦、肅肅雍雍、母怠母凶。大祭祀、帥登歌。大饗亦如之。大射、歌射節。大師執同律、以應軍聲而詔吉凶。大喪、厥作賡諡。凡國之聲、曠正焉。小師亦教瞽矇、掌播鼗祝敔管絃、細諷誦詩、世奠繫鼓琴瑟、九德六詩之歌、以役太師而砥礪。凡樂事必相瞽、蓋瞽之精於詩樂如此。若師曠竇公之屬、殆仙聖之種矣。然詩率他人作、不必已出即瞽、或在中年、不必童孺、未有童孺而瞽、瞽而能自爲詩、如今雲間唐仲言者也。仲言性慧。五歲兩目俱盲。父兄抱膝上授以詩。強記不忘。自三百篇兩京六朝三唐、無不成誦。已旁通經史。爲舉子業、古文辭。嘗解詁唐詩、蒐葺衆家之長、發前人所未發。而其詩亦益工。有擬古百體、遂臻勝境。今所爲編蓬集者、詩諸體咸備、凡八百餘篇、成一家言矣。

夫人目所不見、若存若亡。心所不繫、不生不滅。故荀子曰、君子之學也、入乎耳、著乎心、布乎四體、形乎動靜、端而言、蠕而動、一可以爲法則。小人之學也、入乎耳、出乎口、口耳之間、則四寸耳。何足以美七尺之軀。此爲有目人言耳。事不可臆度、人不可皮相。若仲言者、以耳爲目、聲入心通、矢口而成章、君子之學也。彼離婁見秋毫百步之外、紀昌視虱如車輪、安得生片語而稱之、豈不宇宙間絕竒事乎。國家積德二百年、而大樂未能復古。令仲言在周之庭、若召公所謂師箴、賧賦、曠諷、典教誨者、專一內視、予以正樂、何論曠竇哉。集所以名編蓬、亦子夏事。子夏以哭子喪明、曾子數其罪、而自任離群索居之過。仲言受室有子、而能爲姑蔑、金陵遊、與四方人士上下論議、見解日進。著述日富其竒、殆非一端。造化小兒善妒人、天刑之、安可解也。

大泌山人李維楨本靈父

〔要約〕

古代の音楽はすべて詩に基づき、その職務は盲人に属していた。太師は盲人に「六詩」（風・賦・比・興・雅・頌）を授け、六徳を根本とし六律を音とした。音楽が整うと瞽に歌を率いさせ、大祭祀や大饗では歌を、大射では節を歌わせ、軍勢の音によつて吉凶を伝えた。大喪の際には諡を作り、盲人の規律を監督した。小師もまた盲人に樂器を演奏させ、九徳と六詩を歌い、代々琴瑟を伝えて太師を助けた。ゆえに盲人は詩と音楽に通じ、師曠や竇公のような人物は仙聖に比すべき存在とされた。ただし詩は他人の作でもよく、自ら創作する必要はない。だが幼少期に盲目となりながら詩を自作する者もあり、唐仲言（唐汝詢）がその一人である。彼は五歳で失明したが驚異的な記憶力

盲詩人唐汝詢の受容と評価

中国文学論集 第五十四号

を持ち、経史や三百篇、六朝・三唐の詩を暗誦した。古文辞を学び、唐詩に注釈して諸家の長を取り、前人未発の見解を示した。彼の詩は百体を擬し、「編蓬集」八百余篇を成し一家を立てた。

人には見えず消えゆくものがあるが、心は執着なく生成消滅もない。荀子は「君子の学びは耳に入り、心に留まり、四肢に広がり、言動に表れる」と説く。小人の学びは耳から口に出るだけで、身体を飾るには足りない。仲言は耳を目とし、音を心に通じさせ、口から自然に詩章を生じさせた。これこそ君子の学びである。離妻が秋毫を百歩先に見、紀昌が虱を車輪のように見たとしても、その才は宇宙の奇跡にすぎない。国家が二百年徳を積んでも大業は復興しなかつたが、仲言が周の庭にあれば、召公の言う「師箴・瞽賦・朦誦」によつて音楽を正すことができたろう。「編蓬」の名は子夏のお故事に倣つたものである。子夏は子を失つて泣き盲目となり、曾子はその過ちを数えて群を離れた。仲言は妻子を持ち、姑を蔑まず、金陵を旅して士と議論を交わし、見識と著述を日々高め、奇抜な作を残した。その才能は一方ならず、まるで天が妬んで罰したかのようで、その理は計り難い。

大泌山人の李維楨（字は）本寧

〔原文〕

編蓬集序

夫玄造鑄物、不輕縱以防洩、不輕棄以滅公。故有不予之予、有亡用之用。若斬之、復若私之、見其伎倆以垂世者、往々小有之。蓋人生七尺、馮藉五官、疇能廢一。而世有驟賤、如醴雞莫羨其蒙、不睹天地之大全。其予至涼、其用至無、當也。而聖人以任典樂、若肅雍象武、嗚々周庭虎、折施臺之奏、玄鶴翔而風雨馳、明不掩總、技至此而神全矣。造物之私人、寧有已時、此猶其小者。進之則函河傳經、丘明傳史、羽翼素王、坐空作者、揭日月而中天、浚耒鴻士、提挾二儀、揮斥八極、簸弄萬境、剗心瀝血、終莫之加。以彼其才、即損瞳曠、無妨眉白。誰曰斯人、不足予與。竟亡補於用也。

余讀仲言編蓬集、竊有慨云、仲言予再從弟、少稟異姿、五齡而盲、獨好古詞賦、不輟于口、仲父絕憐愛之。自古文韻語、周秦漢魏、六代三唐以逮近體新聲、無不膝前而口授。長弟士雅亦左提右挈、具逾蓬蒿之間、而志馳騷雅之上。填第遞奏、鴻雁和鳴、津々陂也。士雅姿姿帖括、則又倩塾師之唔呶、代我縣珠。故六籍百家、無不挾其窈窕、而割其上腴、且暮遇之。不漏萬卷、不胷一塵、當天縮構、程古而古、錄今而今、何體不摹、何昇不比、何思不沈、何韻不亮。至於擁衾籍索、踢壁窮息、幾成滯癡、淋漓不休、久之而具體斐然。琅々颯々方駕、先詰其受。沈君公路、積案成裘、士雅手交次之。將縣書國門、先授之余曰、此子封胡雋望、天實刑之。幸毀其目、不毀天竅。與腕以有此敝帶、假其毛羽、兄盍圖之。余問而咨々心折矣。

二仲家稱千里國號連城、未得攬暉、碧落比肩、二龍、尚功戢羽泥濘、連翩雙鶴、朝帷並下、夜榻兩穿。其佗倅無俚、轆軻不平之氣、非托之吟詠、將安寄哉。同氣同憐、烏乎而不深。余竊謂、卜左羞明、俱當垂老、蒐羅博而括囊遠矣。抑又埏埴手刪之訓、同觀百二十國之寶書、繇妙傳述、熏索平生之睹聞、躍然心目。而灑然、毫滯易於吹、萬耳若少而埋照。無論其微、即七襄九曜、雲章霞綺、山岩川瀆、草木榮悴末窮。何態通都大國、秀壤靈區、種々色々未辯、富有乃徒臆之方寸、霧明路符之玄黃、象外則仲言、躡昔昔人稱宋雍、初無令譽、暨嬰瞽疾、詩名大振。然玄珠喫詬、寥々國罕覩。第綠楊紅杏俄然具眼。以嘲仲言、何辭之有。方今區內冠帶、于喁之耦、載牘登籍、纍々大如繡。家握龍文、人持牛耳。咄哉仲言以破光僂僂之見、自乘一麾旗鼓、偏師其間、亦拔扈矣。信乎。不予之予滋大、無用之用彌尊。大治之鑪錘、信誦類若、此豈難諶也。昔王縉表章石丞、孝常纂次補闕之、昔殊軌、士雅實有同心。編蓬命篇、義取卜商之語。云余泉石膏肓、烏衣之情、政自不淺。一罹世網、風味都盡。強弩之末、難爲兄矣。今爲二仲所托也、因爲之序、當介紹旋同好。

皆

萬曆戊戌孟秋日兄唐之屏君公父撰後學陸齊賢希甫父書

〔要約〕

万物を創造する存在は、不要に露出したり失われることがなく、無用のものにも用途が生まれる。人の体は五官を欠くことなく備わることが、世には盲目の者もあり、天地の広大さを知ることができない。しかしその存在にも役割があり、聖人は礼を整え音楽を用い、周の宮廷には大いなる音が響いた。技芸が極まれば神技となり、これを操るのは小さなことにすぎない。仲言のような才をもつ者は、視力を失っても精神の才を天から授かり、人は彼を仲間外れにできない。

私は唐仲言の『編蓬集』を読み心から感嘆した。仲言は従兄弟で、幼少より才を示し、五歳で失明したが経史・詞賦を愛し、口誦をやめなかった。古文は周・秦・漢・魏から六朝・三唐・近体詩に及び、叔父の指導を受けた。兄士雅も支え、仲言の詩は鴻雁の鳴きのように心に響いた。彼は六経や百家を精読し、昼夜研鑽し、ついに大きな才能を体得した。声は澄んで響き、先人の教えを守りながら新たな才を加えた。叔父は「天はこの子に才能と試練を与えた」と述べ、仲言の学識は兄弟の宝とされた。私は深く敬服している。

二仲の家は「連城」と称され、未だ顕達ではないが、志は高く、互いに寄り添って暮らす。彼らの意気は抑えられず、同情を誘うものがある。仲言は詩名を揚げて世に知られ、才は群を抜いた。今日この地の名士は多く、家ごとに文才を誇るが、仲言の詩は特別な位置を占める。今後もその独自の才は評価され続け、『編蓬集』を通じて新たな同志を得るであろう。

時は 万曆戊戌孟秋の日 兄唐之屏君公父撰 後學 陸齊賢希甫書

盲詩人唐汝詢の受容と評価

中国文学論集 第五十四号

〔原文〕

報唐仲言書

去歲得足下書、若詩感、不相忘。得今書、又得詩八章、去日益遠、為意益篤。何以得此於有道。足下目不見世上浮薄情態、可謂洞裡真人。想于人亦無所阿私、而繫心於僕意誠而過厚、僕不能當然、不可以不告。吾在彼、得足下所為詩史、賞其音而笑其有蜀買人之跡。編蓬集唐詩選、雖示我舟中、未得讀而還之、若欲假我以鍾期之聽、于浚各寄一部。吾當以所見高下作序、若不見而序、必不肖以如矣。說我貌何以信觀者。諸篇皆雅什、如捉是文園客倦遊、可謂病夫。鮑子白雲、幽作秋字、尤為精美。至于注離騷作著、豈合作蓋。青蠅作繩、此小誤不足言、刻集若付此手、必受郭公之累。豈不玷於妙語、須求細心者校讐為快、故以告。方有大訛、不及詳悉。恨足下不能書字、不見吾此紙、為爾有措。案門生之怏々造化於人、固不如意。此勞曷極。

乙巳九月晦日 葺密居士許維新

〔要約〕

昨年、足下の書簡を受けて詩に感動し、忘れることはなかった。今回もまた書簡と八篇の詩を頂き、日が経つほど思いは深まる。有道の方からの厚意は過分であり、私のような者には応え難く、ただ感謝を伝えるばかりである。私はあちらで足下の詩史を拝見し、その音律を味わったが、やや蜀の商人を思わせる跡があるのを笑った。『編蓬集唐詩選』は船中で拝見したが読めないまま返した。もし私を鍾期のよきな聴者と見ていただけのなら、浚に一部ずつ寄せていただきたい。見聞の上で序を書くのが正しく、そうでなければ拙文となるであろう。諸篇はみな雅趣に富み、病者の心情を映している。鮑子の「白雲」、幽作の「秋」の字はとくに精緻である。離騷注の著述は合作にふさわしくなく、「青蠅を繩に作る」は小さな誤りにすぎないが、もし本集の編集を担えば煩瑣を免れないだろう。名句を損なわぬよう、慎重な校閲者を求めるべきと告げる。折しも大きな訛報があり、詳述はできない。足下が筆を執れず、この書面を目にできないのは残念だが、これも運命である。門生の成長や造詣も思い通りにはいかない。どこまで労苦が極まるか、尽きることはないだろう。

乙巳九月晦日 葺密居士許維新

〔原文〕

仲言弟編蓬集後序

昔人謂詩窮則工。詩非能窮人、以詩必窮者而後工也。余弟仲言、不幸以盲廢。幸而以盲故、得工於詩。藉令少時而有錢以濟醫藥、當或不盲。即盲、或不至兩目眩然。庶幾得不廢。然仲言窮不極、盲不甚、計必且去而吟咀。矻々窮經、操寸管以期中有、司尺度而人之才不兩有。設機緣稍礙、囁於逢年直。皓首青衿、老矣。平生精力。半已耗于支離影響之語。又何暇沈酣亦籍。漁吹百氏。賈餘勇於風騷間。以成今所謂

詩也。仲言自黜年失明。無論目不辨魯魚。幾於生不識天日。家君問詠杜律、俾朝夕自娛。初不問其能解。一日忽出片紙、令季弟書之以視余、則彼所自為詩矣。余驚叩其所詠少陵諸什。雖不盡解。要自欣然會心。於是廣以風騷、參以陶謝、旁搜開元大曆諸家、徐為口授。遂終日據梧呻吟不輟。恍若棲神千古而自忘其盲。久之即寢食都忘。覺魂交夢想之中、豈非詩也者。而後騷之幽、陶之澹、謝之英、青蓮之豪逸、少陵之雄深、始皆挾扇而窺見其奧。

然則仲言固毀其強弩之末、不得一試、而反、得養其鋒穎、以樹旗鼓於詩壇。天之奪其明於此者、未必不張其目於彼。丈夫三不、朽之謂何。而泯之竟不得標豎、所就孰與仲。多而仲言果得以文采表、見垂千秋名、又何取雙眸爛々而僅傳一青衿以老也。且古以盲廢而工于詩者、豈必張文昌籍。即卜子夏披老西河之上、而築壤室、編蓬戶、彈琴其中、以影先王之夙時、蓋亦為夫子受詩云。倘詩成而揚於風雅、六義無缺、絢傳之名山、死且不朽。後世子云求之不難。而仲言輒不自信、謂士不遊大人以成名、而老死巖穴、經摛藻若春華、亦煙消漸滅耳。復哀集唐人詩、廣于鱗之選、而重加編注、句釋字證、非先秦兩京六代之語、不列於篇、其苦心有是多者。夫仲言恐不能自為詩以傳、而又期托古之詩以傳、亦可悲矣。余友沈君公路、博雅好古、為捐貲首倡、謀以其詩灾木、而余為敘梗槩於末簡、因題曰編蓬集、使知讀書譚道。詠歌先王。聊足自樂。而或乞靈玄晏。不復覆瓿。則當世必有知仲言者。余蓋不多仲言之能詩。而憐其自少業已盲廢盲而至不識一丁。而直思攬撫千古。不廿老死巖穴。為文昌諸君羞。亦一竒也。嗟乎仲言、毋以窮愁自苦。吾子非窮愁。安能有所發憤以自見於世云。

昔 萬曆戊申如月中泮 兄唐汝謬士雅父撰 友弟唐道孚書

### 〔要約〕

古人は「詩は困窮してこそ優れる」と言ったが、それは詩が人を困らせるのではなく、詩を通じて苦難を経て佳作が生まれるという意である。弟仲言は不運にも視力を失い生活に制約を受けたが、そのために詩才を得た。若い頃に治療の資があれば失明を免れたかもしれない。どうか自分の志を廢することがないように、今も詩を吟じ書に思いを託している。人は両立した才能を持ち難いが、仲言は粘り強く学問を積み、詩に情熱を注いだ。幼くして視力を失い、光を知らずに生きたが、父の教えにより杜甫や楚辭、陶淵明・謝靈運・李白・杜甫らの詩を口伝えに学び、その世界を深く体得した。こうして仲言は視力を失っても詩才を養い、詩壇に旗を掲げるに至った。天が目を奪ったとしても、別の形で彼の目を開いたのである。もし文才をもって千秋に名を残せるなら、視力を保ちつつ凡庸に老いるより価値がある。古来、盲目の詩人は少なくない。子夏も晩年に琴を奏で、先王を思った。詩を極めれば名山に伝わり不朽である。

しかし仲言は自信を持って、「大人物に仕えず山奥で死ねば、学問は春の花のように儂く消える」と考えていた。彼は唐詩を集め、諸選

### 盲詩人唐汝詢の受容と評価

中国文学論集 第五十四号

集より広く編み、句解や注釈を加えた。その熱心さは徹底していた。自作詩もまた伝えられることを願ひ、「編蓬集」と題して出版を計画した。沈公路が支援し、私は末尾に梗概を添えた。仲言は若くして視力を失いながら詩を学び続け、隠遁に安んじなかった。これは奇跡である。仲言よ、どうか困難を恐れるな。困窮があるからこそ奮い立ち、名を成すことができるのだ。

時は 万曆戊申二月、兄唐汝譔士雅撰、弟唐道宇書

〔原文〕 編蓬後集小引

唐仲言編蓬集、既懸國門、行四遠矣。其卜居金陵三年、復携家還五茸。友人以所為詩若、文授之梓、是為後編。編蓬之義、取諸卜子夏。子夏居聖門文學科、而於詩尤有深詣。經傳所載、若以繪事通禮。後若因詩而聞于至三、無于起。若論樂、與音相近而不同。廣大精微、至於詩序鼓吹三百篇垂教萬世矣。子夏喪明在哭子之後。仲言則五歲病盲、說詩為放博洽千古、羽翼三唐殆子夏所謂詩之子事、昭乎若日月、燎乎若星辰者、豈至目不見紛華可悅之事、以露天中、而日知其所無、月無總天、所能以至是耶。孔子語子夏、志之所至詩所至焉。所明目而視之不可得而見也。神領天授、吾輩凡目安能窺瞰藩閫。因題數語于後、以足命名編蓬之蒙。

大泌山人李維楨本寧父

〔要約〕

唐仲言の『編蓬集』はすでに國門に掲げられ、広く世に行き渡っている。彼は金陵に三年居住したのち、家族を連れて五茸に帰り、友人が詩文を刻して後編とした。「編蓬」の名は卜子夏に由来する。子夏は聖門において文学を専攻し、詩に深い造詣を持ち、礼や楽に通じ、三百篇の教えを後世に伝えた。子夏が視力を失ったのは子を哭した後である。仲言も五歳で盲目となったが、詩を涉獵し、三唐を羽翼として子夏のいう「詩は日月のように明らかで、星辰のように輝く」という境地に達した。彼は華やかな外見を喜ぶことなく、自然の理に通じた。孔子が子夏に「志の至るところ、詩も至る」と語ったように、明目をもってしても見えないものがある。仲言の詩才は天賦であり、凡人の目には及ばない。よって教語を記して『編蓬』の名を補い、その功績を称える。

大泌山人李維楨本寧

〔原文〕 編蓬後集序

雲間唐仲言、生五歳而瞽、瞽而解読書、著書有編蓬集行世。諸名人為作序。頃且行其後集、而問序不佞。不佞于仲言之先後集、及諸名人之序仲言、序仲言集者既卒業廻環而謂其序仲言集也。無不仲言集也者、其序仲言也、似未足仲言也。夫仲言之集、從仲言之寸竅而出、而此

寸竅所出之集、從仲言之雙耳而入。仲言之雙耳所入、與吾輩之雙眸所入也、何以異。仲言之寸竅所出、與吾輩之寸竅所出也、益無以異。所出所入既等之乎無異、而奚以拘拘然謂吾輩之雙眸是常、仲言之雙耳則異乎。予所異者、獨異此區區之寸竅、既無形埒、自無局騰、何以槩此世人。畫被雙眸管定、何以獨一仲言、能逸出雙眸騰埒而爲六根互用者。留此一椽樣、則造物之用仲言寔異、而非仲言之用六根異也。古人有言、「目者身鏡、視多則鏡昏、耳者身牖、聽衆則牖閉。人之精神以畜用而全也」、審矣。然而奪明于視者、往往偏聰于聽、而窒竅于耳者、文未必併靈于目、則首楞嚴所云、「眼止八百功德、耳具千二百功德」、此亦分數較然之一驗矣。仲言之廢目任耳、與尋常無目者、豈有異哉。惟是記問可襲也、而慧孔其胡可假易、即雜務可營也。

而騷壇之闖入、何以得之、不識字人乎。以此警世人之耳目、以此震耳目之聾聵。較之卜氏、左氏、既讀書識字而始受天刑者、尚未堪與仲言爭奇。惟唐世有靈知禪師、生無雙目、號羅睺和尚、經論文字自然明了、庶幾天眼略同、謂造物者非大用仲言不可。雖然如余不慧雙眸炯炯、而寸竅塵封、以視仲言寔觀顏面、輒敢憫然撻管妄判仲言、爲造物用而未敢謂仲言能用造物也。則以仲言氏駸駸有六根互用之奇、而五十年來尚小用之騷壇耳。蓋嘗挾莢讀書、謬謂神遊千古、或聽決門外事、亦偶得一二如目見然。此浮塵眼根、以六尺墻障之而障、以一尺布障之而障、乃至一片糠糲障之而亦障。即諸障畫屏而不假日月燈光、雖復空曠千里、了歸黑暗耳。錫玄每對此景轉一靜念、輒自悚然、慙汗我此昂然人相、于四生中最稱難得。我此炯炯眼光、于四大中又獨稱神物。奈何以人相而受物相之顛倒、又奈何以神物而受頑物之禁持。縱得如阿那律陀、無目而視、尚虞五通不得漏盡。何況勝義六根、便乃爲浮塵隔越。丈夫兒誰任甘此。然則余輩之有眼而無眼、視仲言之無眼而有眼、誠不啻愧之。而余所望仲言更須自顧此雙耳所入、寸竅所出、與余輩之雙眸所入而出等之爲證發勞相、一箴以清明眼看破黏湛識非一終六非六終一、當知是根非一非六、庶乎塵色既盡、旋見循元。咄咄、仲言尚有進乎編蓬兩集者。

萬曆戊午臘月既望長洲劉錫玄書于白門之寄根居

〔要約〕

雲間出身的唐仲言は五歳で視力を失ったが、書物を理解し自ら著述して『編蓬集』を世に広めた。多くの名士が序を寄せ、近年後集にも序が添えられた。私も諸序を読み、いづれも仲言の作品の集成であると感じた。彼の作品は耳を通じて心に伝わったものであり、耳で得た知識は目で得たものと変わらない。視力を失っても聴覚が優れ、鋭い記憶と聡明さによって才能が培われ、今後も評価され続けるだろう。文字を読めぬ者が詩の世界に入ったのは、人々を驚かせ、鈍った感覚を呼び覚ますためである。卜氏や左氏は字を識ったのち天の罰を受けたが、仲言には及ばなかった。唐代の靈知禪師が視力なくして仏法に通じたように、仲言もまた天との役割を果たしている。視力を持つ私

盲詩人唐汝詢の受容と評価

中国文学論集 第五十四号

でさえ、仲言の心眼の前では恥じ入るばかりである。彼の才能と精神は、長年の誠実な努力とともに詩壇に發揮された。目が見えずとも六根を駆使して世界を超越する姿は、人の感覺を超えた奇跡である。

万曆戊午戊午臘月既望長洲劉錫玄 白門寄根居にて書

〔原文〕 贈唐仲言序

吾鄉楊修齡侍御嘗告我曰、華亭有唐汝詢字仲言者、五歲而瞽、今五十餘矣。自五歲後至今、聞人誦輒記、記又能解。又能以其所記且解者、自出而爲詩文。又注古之爲詩文者、各不下數十萬言。計五歲以後、所記且解者、皆人之口所授於其耳、其耳所授於其心者之積也。五歲以後所出爲詩文及注古之爲詩文者、皆其心所授於其口、其口所授於人之耳與手者之積也。其類既多、其體既備、其立意又皆以該且核爲主。既已剖析疑義、欣賞奇文、至字之音如東冬、清青之屬、問其形、不識如故。予聞而異之。

居二年、予過白門、適晤其人。質之修齡先生所言、皆是。後仲言歸華亭、數月、復晤予。誦予集命園詩、霜後芙蓉猶有露、冬前楊柳暫爲煙之句。予凄然爲誦其全什、察其審聽哀問之狀、爲憫默心酸久之。何者。凡仲言所爲、終其身寄於所不可必者也。數十年中、以其心聽命於其耳、以其耳聽命於人之口。人之口一不至於其耳、則耳無聰、因而其耳不至於其心、則其心不靈。人之喜人詩文而自爲誦者、爲己也。轉以誦於人者、爲人也。人之爲己而自爲誦者難矣、矧爲人誦乎。故曰、仲言終其身寄於所不可必者也。寄於所不可必、其勢宜不能多且久。然能使人之爲仲言誦多且久於其自爲誦、數十年中如一日、如一人者、仲言之誠所爲也。夫其審聽而哀問者、誠也。吁。爲仲言者、亦極難矣。凡得之難、則守之堅。得之難、守之堅、則其口耳出入之際、雖欲加擇焉、而非惟不暇、且不敢。欲加擇焉而有所不暇且不敢、故能積。是仲言所以該且核之故也。

萬曆丁巳嘉平月竟陵友人鍾惺撰

〔要約〕

郷里の楊修齡侍御が語った。「華亭に唐汝詢という人物がいる。字は仲言。五歳で失明し、今は五十を超える。人が詩文を朗読すれば必ず暗誦し、理解もできる。さらに自ら詩文を作り、古典に注釈を加えた。その記録は数十万字に及び、耳から入った知識を心に蓄え、それを基に作品を生み出してきた。彼は作品の完全さと綿密さを重んじ、疑問を細かく分析し、韻の区別も鮮明だが、文字の形は見分けられない」と。私はこれを聞き、大いに感銘を受けた。

二年後、白門で仲言に会ったところ、修齡先生の話はすべて真実であった。のちに仲言が華亭に戻った際、再び私を訪れ、『命園詩』を

全篇暗誦してくれた。その正確な朗誦と真摯な問いかけに、私は深く感動した。仲言は何十年も耳に他人の口を頼り、心に知識を蓄えてきた。自分のために詩を読むのも難しいのに、他人のために読むのはさらに難しい。それでも彼は長年これを続けてきた。これは誠実さによるものである。仲言として生きるのは困難である。得難いものは守るのも難しい。しかし彼は一言一句を正確に聴き取り、真摯に問うことで知識を積み重ね、緻密で豊かな学識を築いたのである。

万曆丁巳十一月 竟陵の友人鍾惺撰

## 注

(1) 唐汝詢『西陽山人編蓬後集』(内閣文庫所蔵本)卷十三「答王幼中」参照。原文は「不肖詢、雲間廢人也。目不見日月者五十年。雖苦志殺青、垂老不怠、而借人口吻、該博未能、以故不能多有所撰述。就燥發所聞、作『唐詩解』五十卷及『海上』、『姑蔑』、『編蓬』三集而已。他若『藝圃雕龍』、『今代樂府』、有稿而未竟也。」さらに、唐汝詢の著作には『彙編唐詩十集』および『詩史』がある。『詩史』の著者については現在なお疑義があるものの、許維新の「報唐仲言書」によれば、その作者は唐汝詢であることが知られる。

(2) 本論における『編蓬集』および『編蓬後集』の引用内容及び統計資料はすべて内閣文庫所蔵本(影印版)に拠った。

(3) 李維楨(一五四七〜一六二六)、字は本寧、湖北京山人。隆慶二年(一五六八)の進士。官歴として庶吉士・編修、修撰、陝西右參議、浙江・山西按察使、布政使、南京太僕卿・太常卿、礼部右侍郎、南京礼部尚書(従一品)を歴任した。晩明を代表する文壇の巨擘で、詩歌各体に通じ、七言古詩・律詩・絶句に秀で、多彩な作風を展開。碑文・題辭も遍く流布。公安派に近いが独自の古文辞を主張し、代表作は『李本寧集』など。『明史』卷二百八十八「列伝第一百七十六」に伝記を立てられる。

(4) 唐之屏、字は公文、(生卒年未詳)、科挙・官歴・職業文人としての活動等は不明。

(5) 陸齊賢、字は希甫、江南文人で、唐家と交誼があったと見えるが、詳細は不明。

(6) 許維新(一五五一〜一六二八)。万曆癸酉(一五七三)挙人になり、乙丑(一五八九)進士になった。官歴として、

盲詩人唐汝詢の受容と評価

山西沢州知州、刑部清吏司員外郎、戸部清吏司郎中、直隸寧国府・浙江松江府知府、河南・山西按察司按察使、光祿寺少卿、戸部侍郎を歴任。病により帰郷。文筆は高古で、書にも長じた。代表作に『河東兵事略』『郡邑談』、および文集若干卷。

(7) 唐汝諤(一五五五〜一六三六)、字は士雅。松江府華亭の人。早年は科挙に失敗し、天啓年間に貢生として常熟県教諭を務めた。学者として詩学に造詣が深く、代表作『古詩解』『毛詩微言』を著す。『古詩解』は『四庫全書総目提要』に収録され、歌謡・楽府や五言古詩を「溫柔敦厚」を旨として編纂。『毛詩微言』は流布時に書肆によって改竄・偽託された。

(8) 唐道孚、科挙・官歴・職業文人としての活動等は不明。

(9) 劉錫玄(生没年未詳)、長洲の人。科挙・官歴については不明。

(10) 鍾惺(一五七四〜一六二四)、湖広竟陵(現在湖北省天門市)の人。明代後期の文学者。万曆三十八年(一六一〇)の進士。工部主事を経て福建提学・立事に任じたが、その後、辞官して隠居者になり、学問に専念した。同郷の譚元春と共に『唐詩歸』『古詩歸』を編纂し、両者の文学活動と主張は「竟陵派」と称された。